

## <小児の救急> 子どもの呼吸困難

お子さんを育てているご両親の皆さんは、「咳が出る」「息が苦しい」「ゼイゼイする」などの呼吸器症状がある時に、早めに救急外来を受診した方がよいのか、迷うことがあると思います。子どもが自分で「息が苦しい」と表現できるのであれば、早めに救急外来を受診しましょう。しかし実際には、「息が苦しい」と自分で訴えることができない子どもの方が多いような気がします。この時の目安になるのは「呼吸困難」の有無です。「呼吸困難」がある場合には、早めに救急外来を受診しましょう。

「呼吸困難」とは、子どもの呼吸が苦しい状態を外側から判断することです。(1) 多呼吸 (2) 肩呼吸 (3) 陥没呼吸 (4) 鼻翼呼吸 (5) 起座呼吸などの症状があります。「多呼吸」は、呼吸数が多いことです。子どもは正常の呼吸数が大人よりも早いので、注意が必要です。正常の呼吸数を記載します。生後1ヵ月未満：40～50回/分。生後1ヵ月-1歳未満：30～40回/分。1歳-7歳未満：20～30回/分。小学生：18～20回/分。中学生-成人：16～18回/分。これより早い呼吸の時は「多呼吸」に該当します。「肩呼吸」は、走った後のように肩で息をすることです。「陥没呼吸」は、息を吸う時にのどの下、鎖骨の上、肋骨の間、みぞおちが、ペコペコへこむことです。「鼻翼呼吸」は、息を吸うたびに両側の鼻の穴が広がることです。「起座呼吸」は横になると苦しくなってしまう、上体を起こしたままで呼吸をしようとしています。これ以外の症状としては「チアノーゼ」といって、顔色が青白くなったり、唇が紫色になります。これは酸素が足りない状態なので、早めに救急外来を受診しましょう。

気管支喘息の病気のある子どもに、喘息発作が起こった時にどのタイミングで救急外来を受診すればよいのかも悩ましいところです。ご存知のように喘息発作では、ヒューヒュー、ゼイゼイなどの呼吸音が派手に聞こえます。ここでも基本に戻って、「呼吸困難」の有無が救急外来の受診の目安になります。ヒューヒュー、ゼイゼイしていても、「息が苦しい」との訴えがなく、「呼吸困難」の症状がなければ通常の診療時間内の受診でかまわないです。

最後に、乳幼児の場合は、犬の遠吠えやオットセイの鳴き声のようなせき込みをする時があります。これは、クループ症候群の可能性があるので、早めに救急外来を受診しましょう。

【中央検査部長兼小児科診療部長 針谷 晃】

